
+コート上の舞蝶+

憂乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

+「コード上の舞蝶+

【Zコード】

Z7616Y

【作者名】

憂乃

【あらすじ】

手塚国光の幼馴染である、天富梨璃。彼女は天才と呼ばれる天才テニスプレーヤー。そんな彼女が日本に帰国する。彼女の見せつけるテニスは、中学のテニス界にも新たな風を起こしあげていた。

+ プロローグ + (前書き)

プロローグです。

主人公の紹介が少々入っています。

+ プロローグ +

『手塚国光』。

中学のテニス界、その名を知らないの方が少ないだろ？

だが、彼女の名を知らない者も少ないだろ？

『天宮梨璃』。

手塚国光の幼馴染であり、天才と呼ばれるテニスプレイヤー。現在はドイツに住んでいるが、立派な日本出身の少女だ。

国外で活発的に活動をし、数々の功績を残している。
その数と言えば数え切れぬほどに多く、どれも優秀で立派なものである。

そんな彼女が、今日　日本に帰ってくる。

(……何処よ、ここ)

あよのあよのと少女はあたりを見回している。

金色の肩もある髪。

瞳はぱっちりとしていて、色素の薄い栗色だ。
迷子、なのだろう。かなり焦っている。

「はあ……、空港から動かない方が良かつたわね」

「……梨璃か？？」

少女 あまみや 天宮梨璃は後ろを見た。

そこには、眼鏡をかけた顔の整った青年。
だが、梨璃は数度瞬きをした。

手塚国光だ。

「国……光で、あつてるのよね？？」

「……ああ。あつてるが？？」

「……老けた？？」

「俺はまだ中学2年だが？？」

(アンタ年齢詐称よ……)

梨璃は内心で溜息をついた。

手塚はそんな梨璃を改めて見、少し口元を緩ませた。

「梨璃。久しぶりだな。元気そうで良かつた」

「ええ、元気よ。アンタは元気すぎそうで腹立つけどね」

「……相変わらずだな、梨璃」

「国光じゃ。性格は相変わらず変わらないわね」

くすくすと笑う梨璃に、手塚は少し視線をそらした。ふと、手塚は梨璃の持つ荷物の多さに目が行った。

「……重そうだな。俺が持とう」

「あら、ありがとう」

「気にする事ではない」

手塚は梨璃の荷物を持つと、バス停に向かって歩き出した。梨璃も肩にかけてあるテニスバッグをしっかりと持ち、歩き出す。

「国光、テニス楽しんでる??」

「……ああ。そのようだと、梨璃も楽しんでいる様だな」

「もちろん。ドイツでのテニスも最高だつたわ」

梨璃はとても嬉しそうに言った。

手塚もそんな梨璃を嬉しく思い、そこからテニスの話に入った。

「ああ、やうだ。俺とまたしてくれるか??」

「……屈辱を味わうだけよ??」

「相変わらずの自信だな。……だが、俺も負ける気はない」

天富梨璃。

8月2日生まれの、現在14歳。
ドイツでテニスの歴史を重ねた。
試合では全勝である。

華麗なプレーをする為、『ホール上の舞蝶』と呼ばれている。
一つ下の弟がいたが、事故で他界

「へえ、重いね。やつてあげるよ、ぐつ音もでなこへりこね」

+ 1羽 天才少女、帰国 + (後書き)

主人公の梨璃です。結構毒舌な設定となつております。

ちなみに梨璃は今現在手塚の事をどうとも思つてません。

これからどうなるかは自分でもわかりませんけど……。

手塚は、梨璃の事が気になる……と言つか、気にしている状態です。

今は梨璃をオールラウンダーにするか、カウンターパンチャーにするかで悩んでおります。

梨璃が帰国し、数日経つた。

手塚家に居候し 梨璃は今日も手塚が学校から帰るのを待っていた
そんな時だった。部屋の扉が、軽くノックされる。

「梨璃、俺だ。入つても良いか？？」
「国光？？今日は何だか早いわね。どうぞ入つて」

そして扉が開いた瞬間、ピヨーンと兎の様に何かが飛び込んできた。その兎の様な何かは真っ直ぐに梨璃に近づくと、とびついてきた。

「つな...!?

ほえーー、かわいい子だじゃーー！」

卷之三

— ほら、英一。その子も困っているよ？？

柔らかな声と同時に、『英一』と呼ばれた少年は梨璃からどいた。梨璃は額に青筋を浮かべながら、キツと『英一』を睨みつけた。

「いきなり何すんの、アンタ」

「うわわわわ、うめん！うめんなさいっ！」

「……国光、コノ何?？」

不機嫌丸出しの顔で、梨璃は手塚に言つ。
手塚は苦笑いで言つた。

「彼らは俺と同じテニス部のメンバーだ。うちにテニスが強い子が居る、って言つたら会いたいって言われた物だから」

「それ先に言つと zwar くれたら良かつたのに……」

「あ、俺は菊丸英二! よつろしくいやーつ……」

梨璃にとびついた少年 英一はピースをしながら言つた。

かなり性格の明るい少年だ。梨璃は冷めた目で英一を見ていた。

「だ、だから」「めん」「やーつ……」

「…………」

「ど、どうしようつ不ーーー許してもうえないにやーつ……」

英一は、先程英一をたしなめた少年 不一に助けを求めた。
不一は困つた様に微笑みながら梨璃を見た。

「1めんね。英一も悪氣は無かつたんだ」

「……いいよ、別に」

「あ、僕は不一周助。よろしくね」

英一に対し、不一は冷静な性格なのだろうか。にしてもずっと笑っている事に、梨璃は不思議そうな顔をした。

「俺は乾貞治だ。よろしく」

「俺は、大石秀一郎」

「俺、河村隆」

乾は眼鏡をかけている少年だ。大石は坊主頭の少年。河村は温厚そうな少年だった。

その場にいる面子の紹介が終わると、梨璃も紹介をした。

「私は天富梨璃。何とでも呼んでくれればいいわ。よろしく」

「よろしくにゃーっ……」

「「よろしくーーー。」」

その後梨璃達は楽しく会話をしていた。

そんな時だった。手塚の母が、梨璃たちのいる部屋に入つてくれる。

「梨璃ちゃん。ちょっと話があるんだけど……」

「あ、ええ。どうぞ」

「……じゃあ、俺達は席をはずそつか」

「あ、いいのよ。光たちもいてちょうどいい。貴方達にも関係あるか

ら」

梨璃たちは顔を見合わせ、頭に『?』マークを浮かべた。
手塚の母親は真っ直ぐに梨璃を見つめると、にっこりとほほ笑みを
浮かべた。

「梨璃ちゃん、明日から青学に通う事に決定したわ」

……その後、梨璃が内心で「それ先に言つとこてくれ」と思ったのは誰も知らない。

「……はじめまして、天宮梨璃です。よろしくお願ひします」

素つ氣なく梨璃は礼をする。

すると、大きな拍手が起こつた。地味に梨璃は驚いた。

「天宮は手塚と仲がいい様だから、手塚の隣の席で良いな」「はい」

手塚母の言つたとおり、梨璃は青学に通つ事になつた。
いきなりだつたのでバタバタはしたもの、なんとか行けた。
梨璃は手塚の隣の席についた。

「緊張したか、梨璃」

「いやいや、私がすると思つわけ??」

「……思わないな」

「でしょ。するわけないでしょ、こんな所で」

梨璃はダルそうに言つ。

そんな梨璃を見て、手塚は小さく笑つた。

HRが終われば、梨璃は質問攻めにあつた。

「天富さん、ドイツ帰りつて本当ーー?」

「え、あ、ああ」

「いいなーーードイツって良い所ーー?」

「ええ。良い所よ」

「手塚くんの家に居候してゐつて本当ーー?」

「本当よ」

1限目が始まれば全員が席についた。

が、梨璃はかなり疲れていた。

「あんなに質問するか、普通……」

「……お疲れ」

ぼちぼちその日を終え、梨璃は入部届けの紙を渡されていました。
入りたい部活を決め、そこに書く。

梨璃は少し悩む様な表情をしていました。

「どうした梨璃」

「……いや、何部にしようかなと」

「え??女子テニス部じゃないのか??」

「強いのか知らないし」

梨璃がきつぱつと言つと、手塚は困った様に笑つた。

「でも、テニス部以外に入る所なんて思い当たらぬだらう?」

「卓球とか」

「やめてくれ」

手塚が即反応し、梨璃に制止をかけた。

梨璃はそんな手塚に笑い、無論テニス部だよと呴つて紙に書き込んだ。

「女子テニス部……つと。ん、オッケー」

「やあつぱ梨璃はテニス部かにや~」

「それ以外に思い当たらないしね」

「梨璃が女子テニス部で名を広める確率100%。……いや、200%」

「頑張つてね、天宮さん!~」

「アンタらいつの間に入つてきた?~?」

「気づけばいるメンバーだ。」

「だがあまい、と梨璃は思つた。」

「私も女テニで頑張るから、皆も頑張つてよね

「「もちろん!~」」

「ううん、梨璃は女テニに入部したのだった。

そして、彼女の歴史はここから始まる。

全てはここから。物語はここから、始まつていいく。

+ 3 羽 青春学園 + (後書き)

次回から本題入っていきます。
本題、と言つても原作に沿うと言つ意味ですが
読んでいただき、ありがとうございました。
.....。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7616y/>

+コート上の舞蝶+

2011年11月23日21時02分発行